し、演段の理、町間之術、他流トハ違ヒアリ曆法天文、悉其理に通達する事御聞に達し、御重寶に被思召、甲州に於て御勘定奉行格に仰付らる、○中略其外、鍔、目貫、縁、頭等を拵えるに、其家の者の細工なも增たる妙手なれば、所々なも聞傳へに賴まれ、其の謝物を取れば、其有る內は酒を飲み遊戲れ、皆に成れば窮す、明日を貯ぬ淸貧に似たりと、世人沙汰しける也、

〔百家畸行傳一〕笹岡市正

市正は生國越後村松の豪家なり、氏は笹岡、名は靜、字は希默、○中略神道に歸依して、神職となる、性魯鈍に似て無慾なり、生平に人に說に、すべて世人四氣をさらば、無事ならんといふ、人其由緣を問ば、こたへていふ、四氣とは、色氣、欲氣、食氣、勝氣なり、人この四氣だに去ば、生涯無事なるべしとをしふ、其躬のおこなひ、最いふ所の若し、一年市正が甥來りて、市正に謂て曰く、爾つねに四氣をさる事を以て、人に敎ふ、汝も今四氣を去て、この家督をわれに讓べしといふ、市正あらそはずして、甥に家督をゆづり、纔の盤纏を懷裏にして、江戸に出て、赤坂東横町に住して、神職を業とし、淸貧をたのしむ、

〔五月雨草紙〕文化の頃は、米穀の價賤き故、お旗本の士は、貧窮の人のみ多かりき、多氣安元は、醫學館の督事にて、侍醫法印なりしが、然も家道甚窮して、屋宇の修理さへ出來ざりしかば、雨の降る折、家の中悉く漏り、傘をさして食事を喫せし事度々ありし由、ある年の暮に、金子拂底にて、諸拂方出來申さず、駕籠の包替せし職工の來りて、催促したるが、若し金子お渡し無くば、駕籠の戸をはづし、持歸るべくと申たる所、法印二念に及ばず、元日の登城に戸なく共苦しからず、金子は何分調ひ申さず迚、其儘に書をよみありしが、元朝果して戸なき駕籠にて、登城されしよし、

〔日本靈異記中〕窮女王歸敬吉祥天女像得現報緣第十四

聖武天皇御世、王宗廿三人結同心、次第爲食、設備宴樂、有一窮女王、入宴衆列、廿二王以次第設宴樂

憂貧